

藤波重次先生の思い出

川 井 誠 一*

私が京大理学部に入學し宇宙物理学教室の門をはじめてくぐったのは昭和25年の春であるから、もう30年近くになる。そこで、学部3年、大学院3年の6年間、人生で一番多感な時期を過ごしたわけであるが、藤波先生は観測講座の助教授として「天体観測第2部」を担当しておられ、教室の屋上にあったブラッシャーの反射望遠鏡で、望遠鏡のセッティングの仕方から始めて、天体写真の撮り方などを御指導いただいた。学部を卒業して大学院に残ることになったが、それまで先生に指導していただいていた「天体観測第2部」をお手伝いすることになり、学部の学生諸君と一緒に星雲写真の撮影に苦労したのも今となっては楽しい思い出である。

今は亡き上田穰先生より、大学院での私に課せられたテーマは「アインシュタイン効果の実証」であった。これは上田先生がジャワかどこかの日食で撮ってこられた写真乾板を測定してアインシュタイン効果を実証することであったが、藤波先生は、写真乾板測定の訓練にもなるからと、その当時先生の主研究テーマであった月のリムのプロフィール測定と一緒にやらないかと誘って下さり、大学院の学生であった故人の伊奈辰之君（東京天文台）と二人、先生の御研究のお手伝いすることになった。その当時、宇宙物理学教室には精密なマイクロ・コンパレーターがなかったので、物理教室にあった1ミクロン読みのコンパレーターをお借りして測定したことを覚えている。また、月食の写真からマイクロ・フォトメーターで地影の境界線を求めることを指導していただいたり、上田先生が定年で退官されたこともあって、私の指導教官は事実上藤波先生であった。

御存知の方も多いと思うが、藤波先生はお酒が非常に好きで、そのころは今のように物の豊かな時代ではなかったが、教室の近くの元田中というところでドブクを売っているところがあったので、観測が終わった後、よく買いにやらされて、先生の部屋で飲んだものである。ドブク特有のあのしぶいような酔っぱいような独特の味をいまだに思い出すことがある。ヘビー・スモーカーでもあった先生は、「しんせい」をくゆらせながら、「どうも上等の煙草は体に合わんでなあ」と笑っておられたのが印象的であった。この煙草が先生の命をちぢめた原因の一つであろうかと思うが、「しんせい」を愛用しておられた先生に、何か庶民的な体臭があって、それが学生の

われわれになじみやすかったのであろう。また、そのころ、先生は奥様と御一緒に麻雀をおぼえられたばかりで、麻雀にかけてはいささか自信のあった私が、御指南役として、よく伊奈君と二人で先生宅に押しかけて、麻雀を楽しんだものである。

私は、大学院を3年終了後教室を離れたので、藤波先生との接触も少なくなったが、昭和42年、現在の職場に変わり、前任者の足立巖氏がやり残していった京大のシュミット・カメラの製作を担当することになり教室に行く機会も多くなった。当然、藤波先生にお会いする機会も多くなり、通産省の機関誌に宇宙開発に関連した光学技術について原稿を書かされた時には、いろいろと有益なアドバイスをいただいた。

先生は、昭和47年4月より京都工芸繊維大学に移られ、写真工学を担当されることになった。その後、喉頭癌を患われ、手術をされたが経過が良好でお元気になられたとこのことを聞いて安心してお見舞にも行かなかったところ、突然先生の訃報に接して、いまさらながら、なぜお元気な時にお見舞に行っておかなかったかと悔まれてならない。

今年の1月26日、大阪梅田にある島津ホールで光学五学会関西支部連合講演会があり、先生は「写真計測と写真測量」というテーマで講演されたが、それが最後の講演となってしまった。その日は、他の用件で東京に行っていたので、講演を聞けなかったのが残念である。また、御葬儀の日も旅行中で参列できず、重ね重ねの不義理の連続で、先生も地下で苦笑しておられることであろう。

「大学とは、よき師を見つける場である」という言葉を聞いたことがある。藤波先生は、私にとってよき先輩であり、よき師であった。その先生も今はこの世におられない。また、私ども天文の学生にとってなつかしい場である宇宙物理教室も、新館ができるとかで取り壊される運命にある。30年という時の流れを痛切に感じている次第である。心から、藤波先生の御冥福をお祈りしたい。

☆

☆

☆

* 大阪工業技術試験所 S. Kawai: Remembrances of Dr. Fujinami